

〈正尊〉の子方について

表 ぎ よ し

〈正尊〉は『平家物語』の「土佐房被斬」などを典拠とする能で、室町後期に観世座脇役者として活躍した観世弥次郎長俊作である。登場人物が多く、舞台の展開もにぎやかであるが、その登場人物の一人に静御前がいる。

〈正尊〉の静御前は今日では各流とも子方が演じることになっているが、〈正尊〉が作られた当時からそうだったわけではないようだ。慶長以前の古写謡本の役名は「静」となっているのが常なので、ツレか子方かはっきりしないが、他曲で「子」の役名を使用する本でも「静」なのは、ツレだったことを思わせる。

慶長三年（一五九八）の奥書を持ち、慶長以前の演出資料として著名な『妙佐本仕舞付』も子方は「子」と記すのが常なのに、〈正尊〉では「シヅカ、女。カイドリニ扇ヲ持」とあり、子方が演じる形にはなっていない。静御前は本来はツレ女であったのが、江戸時代に子方の役に変化していったものらしい。

江戸時代における〈正尊〉上演はさほど多く

はない。寛文以前のものと信じられる鴻山文庫蔵の『寛文書上』では〈正尊〉を所演曲としてゐるのは喜多流のみである。徳川綱吉が將軍であった元禄頃には、綱吉の稀曲好みの影響もあってか観世も〈正尊〉を演じてゐるが、『享保九年書上』によると、観世・宝生・喜多の三流が〈正尊〉を所演曲とするものの、観世は「遠能之分」に入れており、宝生は急には演じられない曲としてゐる。享保以後の江戸城における演能を記録した『ふれながし御能組』（鴻山文庫蔵）によると〈正尊〉は三十五回上演されているが、そのうち喜多流による上演が十四回、宝生が十一回、観世が十回であり、金春・金剛による上演はない。『天保九年書上』（鴻山文庫蔵）でも〈正尊〉を所演曲とするのは観世・宝生・喜多のみなので、金春と金剛は江戸時代には〈正尊〉を上演してゐなかつたらしく、江戸時代を通じて〈正尊〉上演に最も積極的だったのは喜多流であり、観世の場合は観世大夫元章が『明和改正謡本』

刊行に際して「起請文」を小書扱いにしてから上演されることが多くなったようである。問題は静御前の役がいつ頃から子方になったかであるが、子方で演じる方法を取り入れたのは喜多流が早かつたらしい。江戸中期頃の下掛り系の『仕舞附』（法政大学能楽研究所蔵）は静の装束について「一面増女 一かつら 一鬘帯 一閑糸ほし」と記した後に「尤子方ニサスルモアリ」と注記している。この頃にはツレとして演じる場合と子方で演じる場合と両様あったことが知られる。しかし安永五年（一七七六）戸倉屋喜兵衛・須原屋茂兵衛刊の喜多流謡本になると静御前の担当部分の役名が「子」とされており、すでに静御前の役は子方に定着してゐることがわかる。享和三年（一八〇三）喜多七大夫古能の奥書を持つ『喜多流仕舞附并後見心得』（檜常太郎氏蔵）にも〈正尊〉に関する記事に「一中入後子方江太刀ヲ渡ス」「一子方ト弁慶長刀ヲ渡ス」などとあり、『喜多流仕舞附抄』（昭和七年複製本による）は、成立年不明（中条丹波守宗能の奥書があるが信用できない）ながら「静ハ子方之役也。坪折、大口、扇持。判官ニ続キ出ル」と明記されていて、江戸時代中期以後は静御前の役を子方が担当するようになってゐたことを裏付けてゐる。

観世の江戸時代における〈正尊〉に関する演

出資料として早いものに元禄十二年小河多左衛門刊の謡本がある。この謡本は上欄に様々な注記があるが、静の装束についての注記の中に「面小面」とあるので、この頃はまだ静はツレの役だったと考えられる。一方、観世大夫元章が寛延三年（一七五〇）に興行した十五日間に及ぶ前例のない長期間の勸進能に、〈正尊〉が最終日に出て日吉猪右衛門がシテを勤めたが、その勸進能の詳細な番組でシテのみならずワキやツレの姓名や年齢までを克明に記した観世宗家蔵の『寛延三年神田筋違橋勸進御能組』によると、その時の静の役は福王長五郎為睦であった。同書の年齢注記によると長五郎は当時十五歳である。ツレか子方か微妙な年齢ではあるが、長五郎は別の日に〈船弁慶〉〈安宅〉〈隅田川〉などの子方を勤めているので、〈正尊〉の場合も子方として出演したと見てよいであろう。しかし寛延三年の段階で観世の〈正尊〉の静御前が子方として定着していたわけではない。観世元章改正の演出を安永五年に蒲生成章が書き留めた『面衣装附』（能楽研究所蔵の静の装束には「閑面佑女若きよし」とあって、末尾に「子方の時ハ尤面なし」と記されている。元章の時代にはツレと子方の両様の演じ方があったと見るべきであろう。

観世で静御前が子方の役として定着した時

期は定かでない。元章以後に刊行された観世流謡本の静御前の役名はあいかわらず「シヅカ」のまま、明治に入ってもそれは続いている。もっとも、明治になって多数刊行された観世流謡本は、競争の産物としてか曲の冒頭や前付けに諸役を列挙することを常とするようになったが、そこでは静御前が子方に一定しているの、明治時代に子方が演じていたのは間違いない。観世流で静御前が子方の役として定着したのは、江戸時代も末になつてからだったのでなからうか。

静御前を子方で演じるのは、まず喜多流で定着し、その影響を受けて観世でも行われるようになったと考えられる。宝生がどうであったのかは不明であるが、弘化勸進能では子方とツレ（夜討曾我）の團三郎などの両方に出演した矢田鐘太郎が〈正尊〉の静を勤めており、おそらく観世と同様、喜多の影響を受けて徐々にツレから子方へと変えていったのである。登場人物の多い曲であるために、静御前を子方にするには舞台上に変化をつける点で効果的だったと思われる。ツレから子方への変化は〈船弁慶〉など他の子方が登場する曲の影響もあったろうし、〈正尊〉以外にもツレから子方へと変化した例があるのではないかと思われるが、その点については別の機会に考えてみたい。（国士館短期大学講師）